



Kim Jeawon (The Third Space 01) 2015



Kim Jeawon (The Dried-up Well) 2016



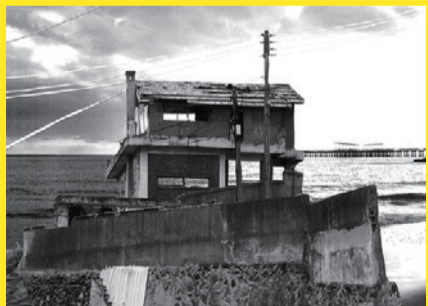
Kim Jeawon (Unfamiliarity of Intimacy) 2016



Kim Jeawon (The Dried-up Well) 2016



Kim Jeawon (The Dried-up Well) 2016



TOPIC 01

アーティスト・イン・レジデンス プログラム 2017 公募プログラム ビジュアル・アーツ部門

キム・ジェウオン

滞在期間：2018年1月5日(金) - 3月5日(月)

京都芸術センターのアーティスト・イン・レジデンスプログラムでは、次年度に滞在制作を行うアーティストをヴィジュアル・アーツ部門とパフォーマンス・アーツ部門から隔年で交互に募集しています。昨年度実施した募集では総計173件の応募があり、韓国・ソウル在住のキム・ジェウオンが選ばれました。

韓国北西部の港湾都市クンサン。キムの故郷であるこの街は、日本による統治時代の建造物が多く保存される歴史的区域です。幼少期から慣れ親しんだこの風景が、自身の創作に対する感性と強く結びついていると彼女は言います。韓国という土地に建つ「日本建築」が、私たちが街で目にする「外国風」の建物とは異なる意味を持つことは自明です。しかしキムのアーティストとしての実践は、建物における歴史的背景を丹念に調べながらも、史実を直接伝えるための手法を軽やかに回避します。繊細なコラージュによって、場所に遺された記憶や気配を詩的に描くインスタレーション作品を多数発表しており、凝り固まった認識が緩やかに解体される心地よさが感じられます。

今回のアーティスト・トークでは、キムが近年取り組んだプロジェクトを紹介しながら、京都で過ごす2ヶ月間のリサーチプランについて話します。ゲストにアーティストの鎌田友介氏を招き、彼の作品のために二人が韓国で協働したりサーチから、キムの関心を明らかにしてい

きます。そこでは、日本から韓国へ移住し、統治時代の民家の歴史を語り伝える活動をしている女性へのインタビューを行うなど、よりプライベートな領域へ焦点が当てられています。彼女が京都滞在によって得る視点から、私たちが何を感じ取り、見出すのか期待が高まります。

キムが言う「(戦争を経験していない)私たちが若い世代がしなければならないこと」とは、何かの物差しで事実を明らかにし、境界線を引き直すことではありません。そもそも境界とは、決してはっきりと目に見えるものではなく、もっとグラデーションがあった状態で立ち現れるものではないでしょうか。「私」と「あなた」を分ち難くするその線は、現実における他者への想像力を強く喚起させると同時に、決して明快な回答にはたどり着けないかもしれません。国と国、人と人との関わり、ミクロとマクロの視点がオーバーラップし、膨大な過去が私たちが生きる今日へと接続される。当たり前のことかもしれませんが、「今」を生きる私たちとして歴史を再考するこの機会に、どうぞご期待ください。

作家ドラフト2014で『D Construction Atlas』を発表した鎌田さんが、久しぶりに京都芸術センターへ。関心領域が極めて近い二人ですが、その手法は一見すると真逆。それぞれがリサーチの中で何を見つけているのか、必聴です。
平野春菜(アートコーディネーター)

Profile

Kim Jeawon (キム・ジェウオン)

ビジュアルアーティスト。クンサン(韓国)出身、ソウル(韓国)在住。ニューヨーク・スクール・オブ・ビジュアル・アーツ大学院修了。史実と自分自身の記憶を織り交ぜてつくりだす場所を「第三の空間」と捉え、夢想的なインスタレーションを展開する。主な展覧会に、『Your Hand, My Heart』(Gallery Simon, ソウル, 2017)、『Nearly Distant』(SVA Flatiron Gallery, ニューヨーク, 2014)、『Carry More』(日韓交流展(Keppo Art Center Gallery, ソウル, 2014)など。2016年にトーキョーワンダーサイトのリサーチ・レジデンス・プログラムに参加し、向島(東京)で滞在制作を行った。



アーティスト・イン・レジデンスプログラム2017
公募プログラム ビジュアル・アーツ部門
キム・ジェウオン
Kim Jeawon アーティスト・トーク
日時：1月8日(月・祝) 17:00-18:30
会場：ミーティングルーム2
登壇：キム・ジェウオン、鎌田友介(アーティスト)
料金：無料
定員：40名(先着順/要事前申込) ※逐次通訳あり
※イベント情報(P2)もご覧ください

REVIEW

音楽

創造は泉のように 筒井はる香

『カフェ・モンタージュでの1時間／Bach』
2017年11月18日(土)
カフェ・モンタージュ(京都市中京区)

先日、「音楽家のための音楽修辞論入門講座」を受講する機会があった。講師の三島郁氏によれば、中世から教養人にとって必須の科目の一つである弁論術は、ルネサンス期にクインテリヤヌスによって音楽との類似性が強調されるようになり、やがてバロック期に言葉の意味や理解に音楽を結び付ける「音楽修辞学」が発達した。

そこで、今回の演奏会「Bach」は、そうした音楽修辞学の実践という意味でも、バッハの創造性を知る意味においても、刺激的なプログラムであった。チェンバロのための「前奏曲」ト長調BWV902は、心地よい揺らぎを感じさせる演奏で、チェンバロ奏者の三橋桜子氏は、バッハの修辞学的表現をあからさまに誇張することなく、ごく自然に表現した。ある調の主和音に終了すると思わせておきながら別の調に行き、その上、規則的に刻まれていた拍(はく=タクト)がシンクペーションのリズムによって微妙にずらされるところは、不意を突かれて面白かった。

「ヴァイオリンと通奏低音のためのソナタ」ホ短調BWV1023は、色彩感も様式も著しく異なった4曲から構成されているためか、楽章ごとの関連性が見いだしにくい。ホ短調という調性のもつ一定の性格が全楽章に貫かれた演奏であれば、全体の統一がとれ、その上で各楽章の多様性がより浮かびあがったと思う。

関西圏の公演・展覧会について、
若手レビューが月替りで執筆します。

今回の公演でもっともインパクトを与えたのは、「トッカータ」ト短調BWV565だろう。もともとオルガンのための曲として有名な作品を、今回は、近年の研究を踏まえて斎藤佳代氏がヴァイオリン・ソロ用に編曲して披露した。建造物のミニチュアや原画のように作品の骨組みや論理的展開の道すがすが透けてみえるようだった。響きすぎず、粒立ちのよい音のバロック・ヴァイオリンで演奏されたことも功を奏した。モダン楽器より張力が弱いため、音が響きすぎず、よい意味で素朴だからだ。

公演最後のプログラム「ヴァイオリンとチェンバロのためのソナタ」ホ短調BWV1016は、修辞学的な表現が多く含まれており、その意味では「語り」の要素が若干弱かったが、その一方で、楽器の鳴りがどンドンよくなっていくのを感じた。特にエネルギーに満ちた第4楽章は好演だった。

この劇場には、本棚、レコード、観葉植物、食器棚、座り心地のよい椅子、間接照明など、親密なアイテムが揃っている。公演のない日はカフェとして機能しているため、当然といえば当然なのだが、このようなくつろいだ空間で音楽を聴くことは、コンサートホールで襟を正して聴く音楽体験とは一味違う。「カフェ・モンタージュ」の主である高田伸也氏の解説を聴きながら、選りすぐられた音楽を聞くのは何とも楽しい。

つつい はるか／同志社女子大学非常勤講師ほか●歴史を辿って祇園の町を歩きました。すっかり様変わりしていますが、時代の痕跡もしっかり感じることができました。



Cafe Montage

演劇

ユートピアすぎる ピンク地底人3号

gallop『ユートピア』
2017年11月17日(金)～19日(日)
スタジオヴァリエ(京都市左京区)

葵マコ、伊藤彩里、木村悠介、三鬼春奈によるチーム、gallopが9年ぶりに再結成されるとの由、開演すると三鬼が現れ、客席に向かって鳥ハムの作り方を説明する。彼女が「冷蔵庫で一週間は保存がききます」と言い残すと、毛むくじらの着ぐるみを着た葵が現れ客席数を数える。するとスーツケースを持った木村がパッキングの仕方を伝え、最後に伊藤が同棲についての理念を語ると残りの3人が舞い戻り、服を脱いで全裸となる。全裸となった彼らは全員で朴訥な言葉を発したり丸い光の上をジャンプしたり花嫁になったりと様々なパフォーマンスを行う……。

現役の踊り子である葵を除き、彼らは訓練された「身体」を持つダンサーでもなければ「言葉」によって世界の真理を捉える詩人でもない。そうなる当然、彼らのパフォーマンスは平凡な「言葉」と「身体」に頼らざるを得ない。その二つによって出来ることはそう一つ、「言葉」と「身体」の摩擦、それにより「言葉」にならない一回性の「何か」を生み出すこと(「言葉にならない何か」、それは芸術と同義である)。

劇の中盤、葵と三鬼が向かい合い、己の「身体」を丁寧に確かめ合うシーンがある。葵は鎖骨を指差し「ここでココロログが死んでいます」と言う。その時、受け手である我々は瞬時に鎖骨の下に眠るココロログの死骸を思い浮かべるわけだがもちろんそこにココロログは死んでいない。にも関わらずココロログが死んでいるように思えるのは、旧約聖書の第一章第三節「神、光あれと言ひ給ひければ、光ありき」を持ち出すまでもなく、「言



Photo : Yoshitomo Nagasaki

葉」にはそこに存在しなかった対象を生み出す根拠的作用があるためである。さらに「ココロログ(言葉)が鎖骨(身体)で死んでいる」というあり得ない掛け合わせにより「言葉」で言い表せない「何か」を生み出すことが出来るわけだ。またそこに音楽やシーンの構成等が絡み合い「言葉」に出来ない「何か」を豊饒なものへと深めようという意気込みを劇全体に感じることが出来る。

しかし全てのシーンにおいて摩擦があったとは言えない。その原因(或は魅力)の一つがgallopの特徴である演出家の不在だろう。いざさかユートピア(自由)すぎるのだ。例えば、前述した全員が全裸になるまでの一連の流れ(期間は一週間、参加する人数、荷物のパッキング)はユートピアへ我々を誘う旅立ちの儀式と見て取ることは難しくないが、全く関係がない(ように思われる)同棲の話が入り込む、座禅を組んで何かに驚くリアクションは凡庸、一度全裸になった彼らが再び服を着てパフォーマンスをする必然(効果)も見当たらない。通底音がコントロールされていないパフォーマンスはアイデアの提示で終わってしまうことが多いが、それでもぎりぎりこの世界を「ユートピア」たらしめていたのは、全体のムードを決定づけるDaedelusやLou Harrisonによる極めて白屋夢的な音楽と何よりパフォーマンスそれぞれ裸によって際立つ個性的な「身体」、その具体性(枠組み)が自由すぎる世界に輪郭を与えていたからだと思う。

(11月17日14時の回を観劇)

びんくちていじんさんごう／演出家●ピンク地底人3号作「黒いらくだ」が第23回劇作家協会新人戯曲賞に応募総数231本の中から入賞しました。拙作を収録した戯曲集がブロンズ新社より発売中です。是非お買い求めくださいませ。

美術

「私」から「私たち」へ ひらかれる「物語」

清澤暁子

金サジ個展『STORY』
2017年11月28日(火)～12月10日(日)
アートスペース虹(京都市東山区)

写真家の金サジ(1981年京都生れ)による本展は、2015年より同名で続けているアートスペース虹での3回目の個展である。その間、金は同シリーズで第39回公募キヤノン写真新世紀2016においてグランプリを受賞、2017年11月には受賞展として東京都写真美術館で新作を加えた個展を開催し、本展はその巡回展でもある。

本シリーズ最初の作品は、2013年に制作した《少女》(本展は未出品)。美しい刺繍の入った頭飾りを付け、緑と赤の鮮やかなチマチョゴリを身にまとった「少女」を斜め後ろから捉えた写真だが、その頭飾りは熊である。深い黒を背景に静かに佇む不思議な姿は、西洋絵画の肖像画を思わせる。イメージは金の想像の産物であると同時に、熊が女の姿となり神の子を生んだという古朝鮮の建国神話に基づいている。

金は、自らのルーツである韓国の伝承と日本で生まれ育った経験、記憶を行き来しながら、両者が彼女の中で焦点を結んだイメージを基に、「私のための創世の物語」を写真に託し紡ぎ出してきた。

出品作《双子》は、チマチョゴリの原型のような赤と青の衣装を身につけた双子の少女が、まだあどけない表情で正面を向いて並ぶ。頭には松ぼっくりを中心に松の葉を束ねた冠のような大きな飾りを付け、円板型の素朴な首飾りを下げている。寿ぎの場での正装だろうか。本作の隣には《大きな五葉松》が、月に根をはり漆黒の宇宙にぼっかりと浮かぶ。この双子は松の精かもしれない。黒ではなくグレーで奥行きのある背景が採用され、実際のフォトスタジオでの記念撮影のような現実感も生んでいる。結果、二人を物語の登場人物だけに留めて

はおかず、モデルの内面がにじみ出した肖像写真ともなっている。

この二重の存在感は、見るもののうちに現実と空想の間の往還運動を生み出し、写真中の人物は力強いリアリティを伴って像を結ぶ。こうした働きは、写真という手法がもつ距離感によるところが大きいだろう。写真は、撮影する作者の意図から最終的には自由に、ある状況を目の前に差し出すからだ。克明に捉えられたモノは、物語の細部を補強する。また、今回新たな展開でもあった虹色の地層があらわになった断崖や深い洞窟などの風景は、物語に場所性を与えると同時に、見る側の想像力と記憶の双方に一層働きかける。

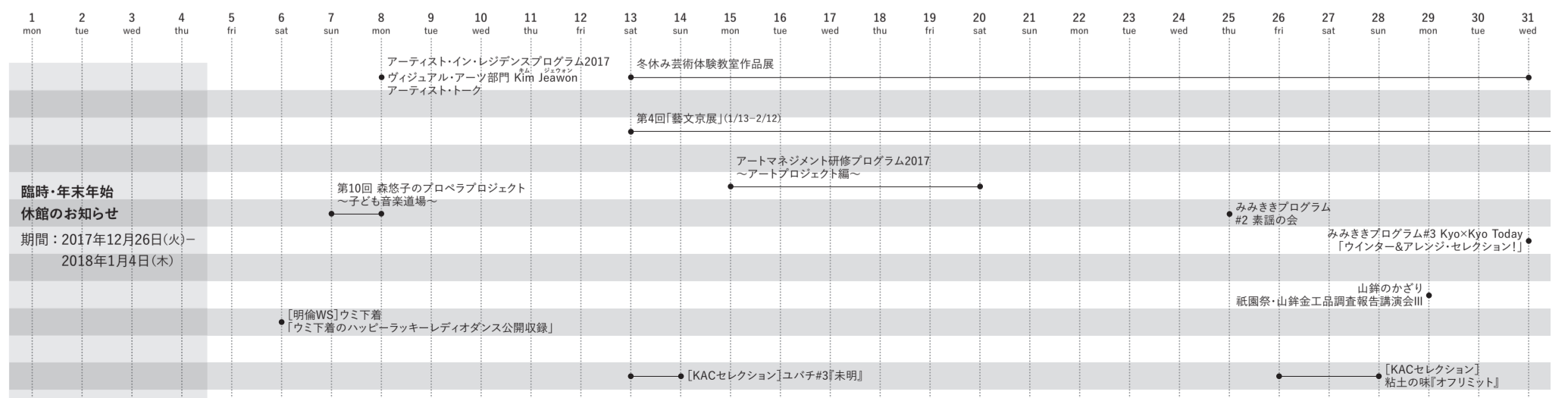
こうして展開する金の「物語」は、私たちがそれぞれに宿した記憶や感覚と触れ合い、時に響き合い枝葉を広げていく。これは彼女自身の物語でありながら、私たちにも開かれた「故郷」についての物語である。そして、どこかで確実に繋がっていく、そんな予感とともに次の展開を楽しみに待ちたい。

きよさわ さとこ／アートエリアB1事業担当●10月から阪中之島線なわ橋駅にあるアートエリアB1の企画運営に携わりはじまりました。本展会場のアートスペース虹が12月24日で閉館します。忘れられない展示がいくつもあります。そしていつも熊谷さんが笑顔でお茶を勧めて下さいました。本当にありがとうございました。



金サジ《双子》2017、デジタルプリント

EVENT CALENDAR 1/1 ▶ 1/31



図書室休室日：1月31日(水)

TOPIC 02

みみききプログラム#3 Kyo×Kyo Today 「冬」のテーマで展開する 華やかなレパートリー

Kyo×Kyo Today は、2011年に開始した京都芸術センターと京都市交響楽団のコラボレーション企画。奏者の息遣いが聞こえるほどの近い距離で音楽を楽しめる室内楽シリーズです。第8弾となる今回は、京都市交響楽団の弦・管・打楽器奏者9名の団員による華やかなアンサンブル「京都しんふおにえった」をお届けします。ヴァイオリン奏者で、編曲を担当する小田拓也さんにお話を伺いました。

—「京都しんふおにえった」のアンサンブルは、9人での編成のためのユニークな編曲に定評があります。取り上げる曲はピアノ曲から民謡まで様々ですが、どのようにしてアレンジしていくのですか？

「奏者の顔」を思い浮かべてアレンジしていくのですが、「こんなパッセージを担当させたら」とか、「もしも〇〇だったら」などと、色々想像しながらちょっと意地悪なイメージで作っています。ある奏者は「う〜ん」と唸るような超絶技巧なのに、その隣で小馬鹿にしたような旋律が流れていたら、当事者のちょっとした腹立たしさも傍から見れば滑稽です(笑)。そして、メンバーもプロ意識から、技巧的にも難局に立たされると腕が鳴るわけです。相乗効果なんですよね…。

当初は技術的に超絶技巧のようなことばかりを追い求めるアレンジをしていたのですが、ある時ちょっと風変わりな旋律や、ちょっと恥ずかしいと感じるような部分を織り交ぜてみたところ、メンバーがそれぞれの解釈のもと咀嚼して楽しそうに演奏するわけです。

レパートリーは、皆さんが知っている楽曲を使っているのですが、お客さまにとってはわかりやすいコンサートです。しかし、それらを創作料理のように変化させていくので奏者にはセンスが要求されます。そこは本当にスマート且つ、あっと驚くようなクールな演出もメンバーが自ら自然に加えてくれます。

—今年「冬」をテーマに展開するプログラムとなっています。今回の聴きどころを教えてください。

いつものコンセプトに「冬」というテーマを加え、超絶技巧溢れるクールな演奏はもちろん！ユーモアたっぷりのステージは、クラシックのイメージを覆すようなコンサートとなること請け合いです。

本公演にて、フィギュア・スケートの音楽で使用されたモンティ作曲「チャルダッシュ」を演奏します。



A. Shimada

この曲は普段ヴァイオリンとピアノでよく演奏しますが、今回は、ヴァイオリンとホルネット(トランペット)がソリストとなり、二人の個性とテクニックがぶつかり合う、まるで二つの楽器が対戦するようなアレンジとなっています。ヴァイオリンが提示する超絶技巧によるメロディーを、ホルネットが負けじと奏で返します。

ロシア民謡「二つのギター」も、ヴァイオリンにちょっとしたハプニングがあったりして…。

「奏者が楽しければ、お客さまもきっと楽しくなる。楽しまなければ、良い音楽は生まれません」結成9年目を迎える今も、変わらずそう思い続けています。

クラシック音楽にジャズやラテンの要素をアレンジで加えたアンサンブル公演。曲間のお話もお楽しみに。メンバーそれぞれの名人芸をどうぞ堪能あれ！

////////////////////
まだまだ寒い冬の夜ですが、華やかな音楽に包まれながら温かく過ごしてみたいかがでしょうか。

當間芽(アートコーディネーター)

みみききプログラム#3 Kyo×Kyo Today

「ウィンター&アレンジ・セレクション！」

日時：1月31日(水)受付18:00 開場18:30 開演19:00

会場：講堂

出演：中野志麻(ヴァイオリン)、片山千津子(ヴァイオリン)、小田拓也(ヴィオラ)、渡邊正和(チェロ)、出原修司(コントラバス)、筒井祥夫(クラリネット)、中野陽一朗(ファゴット)、ハラルド・ナエス(トランペット)、中山航介(パーカッション)

曲目：リスト「愛の夢」第3番、ワルトイフェル「スケターズ・ワルツ」、ドボルザーク「ユーモレスク」、ロシア民謡「黒い瞳」、モンティ ヴァイオリンとトランペットのための「チャルダッシュ」ほか

料金：一般前売1,800円/当日2,000円

学生1,000円(前売・当日共)

主催：京都芸術センター、京都市交響楽団、京都市半券割引：京都芸術センター窓口でのチケット購入時、もしくは WEBサイトや電話で予約し、公演当日に清算される際に、「みみききプログラム」の他の公演の半券をお持ちいただいた場合、200円割引します。1回のみ有効
※イベント情報(P2)もご覧ください

TOPIC 03

ロームシアター京都×京都芸術センター U35創造支援プログラム 「KIPPU」

京都芸術センターで制作し、
ロームシアター京都で上演するアーティストを募集します。

若手アーティストの発掘と育成を目的に、ロームシアター京都と京都芸術センターが協働し、新たな創造支援プログラム「KIPPU」を開始します。

京都芸術センターは2000年の開館以来、芸術の新たなあり方を求めるアーティストの活動を支援するため、「制作支援事業」として12室のスタジオ「制作室」を無償で提供しています。また、ロームシアター京都は、2016年にリニューアルオープンし、文化・芸術の創造・発信拠点として京都に新たな「劇場文化」を形作ることを目指しています。

本プログラムでは、若手アーティストを対象に、制作に専念できるスタジオ(京都芸術センター 制作室)と、舞台設備と技術の備わった劇場(ロームシアター京都 ノースホール)を無償で提供します。これまでの経験よりスケールの大きい、150~200席規模の作品作りに挑戦することで、今後同規模の劇場で公演を実施する力を養うことを目的としています。さらに、広報協力(両施設のプレスリリースや広告媒体への掲載)や制作協力(制作体制や課題に応じたアドバイスやコーディネート)、批評家による批評文の提供を通じて、公演プロデュースの側面からもサポートします。

集中的に創作に取り組むことで、京都から次の境地へ発進していくアーティストを求めています。切符(KIPPU)は2枚(予定採択件数)。次代を担う意欲的な応募をお待ちしております。

////////////////////
稽古場・公演会場の提供だけでなく、広報・制作面も両館でサポートします。京都から大きな作品制作に挑戦したい方、ぜひ応募ください！

堀越芽生子(アートコーディネーター)



ロームシアター ノースホール



京都芸術センター 制作室7

ロームシアター京都×京都芸術センター U35創造支援プログラム「KIPPU」

応募資格：

- ・京都で1ヶ月以上創作し、舞台芸術作品を上演する意欲があること
- ・代表者あるいは主たるアーティストが概ね35歳以下の個人及び団体
- ・過去に2作品以上、上演経験があること
- ・舞台芸術のジャンル、形態、居住地、活動拠点 不問

応募条件：

- 〈京都芸術センター 制作室〉
公演日の最長3か月前から使用可。最短でも1か月は使用すること
- 〈ロームシアター京都 ノースホール〉
以下のいずれかの日程で、ロームシアター京都 ノースホールで上演できること(以下の日程には、仕込み、リハーサル、本番、撤去すべて含まれます)
2018年12月10日(月)~16日(日)
2019年1月14日(月・祝)~20日(日)
2019年2月13日(水)~16日(土)

応募期間：2017年12月20日(水)
—2018年2月5日(月)(必着)

※詳細はウェブサイトをご覧ください
※募集情報(P2)もご覧ください

TOPIC 04

伝統芸能文化創生プロジェクト 「三味線三昧」

伝統芸能文化創生プロジェクトとは、伝統芸能文化を発信し将来に継承する拠点施設となる「伝統芸能文化センター」が備える機能の実現を目指して、研究・創造・普及・窓口、ネットワーク・コーディネート、国内外への発信・交流といった機能を強化していくための取組です。「伝統芸能アーカイブ&リサーチオフィス(TARO)」が主体となって、このプロジェクトを推進しています。

「三味線三昧」は、日本の音楽を代表する弦楽器である三味線を成り立たせる技術の持ち主が一堂に集い、三味線を総合的に紹介する催しです。道具・楽器製作者が原系製造、糸製作、棹製作修理の解説・実演を行った後で、長唄三味線、柳川三味線、新内節、文楽三味線、津軽三味線といったそれぞれの音楽の種類について、演奏者が実演を交えながらお話しします。材料から楽器が作られる工程を知り、それを使って演奏される音楽各種の違いを聴き比べることができる貴重な機会です。

伝統芸能文化創生プロジェクト「三味線三昧」

日時：2月4日(日) 13:00~17:00

会場：講堂

出演：〈道具製作〉

佃三恵子(原系製造)、小篠敏之(糸製作)、今井三絃店(棹製作修理)

〈演奏〉

柘屋勝七郎(長唄三味線)、林美音子(柳川三味線)、新内枝幸太夫(新内節三味線)、鶴澤清志郎(文楽三味線)、柴田雅人(津軽三味線)

料金：無料

定員：150名(先着順/要事前申込)

主催：伝統芸能アーカイブ&リサーチオフィス(京都市、京都芸術センター)

※イベント情報(P2)もご覧ください

Since 1971
MAEDA'S COFFEE
KYOTO ART CENTER 1F
MIYOMACHI, TAKOYAKUSHI
NAKAGYOKU, KYOTO
TEL.075-221-2224
10:00~21:30 everyday

林勇気
『電源を切ると何も見えなくなる事』
2016年4月5日~5月22日
展覧会カタログ 定価 500円(税込)
京都芸術センター窓口、もしくは下記ウェブサイトより
ご注文いただけます。
<http://www.kac.or.jp/shop/>

京都芸術センター



交通案内
○市営地下鉄烏丸線「四條」駅/
阪急京都線「烏丸」駅22番出口・24番出口より徒歩5分。
○市バス「四條烏丸」下車、徒歩5分。

開館時間
○ギャラリー・図書室・情報コーナー 10:00~20:00
談話室・チケット窓口
○カフェ 10:00~21:30
○制作室、事務室 10:00~22:00

休館日
12月26日から1月4日

〒604-8156
京都市中京区室町通蛸薬師下る山伏山町546-2
TEL：075-213-1000 FAX：075-213-1004
E-mail：info@kac.or.jp URL：http://www.kac.or.jp/
twitter：@Kyoto_artcenter
http://www.facebook.com/kyotoartcenter

